

一九七七年二月一〇日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コトポ幅ヶ谷九〇四 電話(03)3377-4649

振替 〇〇一〇〇一九一五八四三一 労金 東京労金本店 No.1154163

FAX(03)3299-5367

購読料 月額600円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言

労働組合と政党の関係について	2
党員の良心は健在なり	3
——各地の討論ひろがる——	
久保派、村山派「リベラル新党」対立激化	5
アメリカ労働組合再生のたたかい	8
——新たな戦闘性の芽ばえ——	
安保条約廃棄・日米地位協定粉砕が「沖繩の心」	12
——十一・二集会での新垣洋子氏の提起から——	
健康に留意し、勝つまでたたかおう	14
——長崎・佐世保闘争団の仲間と交流して——	
読者からのおたより	16

◇好評発売中 上野建一著 社会通信刊◇
 政界再編後を読む——護憲の旗を掲げて
 四六判上製、二百頁、千五百円(千三百十円)

旬刊 社会通信

NO. 622

一九九五年二月一日

一九九五年二月一日発行
(毎月一日・十一日・二十日三回発行)

■ 巻頭言 ■

労働組合と政党の関係について

戦後五十年、労働組合と政党との関係についても大きな変化が起きた。総評の誕生が、共産党の労働組合支配に端を発したことは、今では歴史の事実である。現在、「総評」＝連合と社会党との関係では正反対なことがおきている。労働組合による政党支配である。自治労、全電通、全通、そして社会党員がほとんどいない電機連合主導の「二一単産」による社会党解党策動はその最たるものだ。他方、旧同盟系労組は「民活・規制緩和」の原則的立場から、新進党支持を明確にしている。黒猫ヤマトの労働組合が「郵政民営化」を強硬に主張する小泉純一郎氏を支持する方向を打ち出したのも、根は同じ、「企業あつての労働組合」に立つからだ。小泉氏は得々とこう語る。

「ヤマト運輸の労働組合は、いままで社会党支持一辺倒だった。だが、総裁選（自民党）における私と橋本龍太郎候補の議論を聞いて目が覚めたという。私の唱える『郵政民営化』という考えは、自分たちと全く同じ考えだということに気づいたのである。宅配便という民間の『郵便業務』に携わる同社にとって、私の主張こそ納得いくものなのである。それに比べ、全通を抱える社会党の立場は、むしろ同社のような民間企業の活動を抑えつけるということに初めて気づいたというわけである。そこで、これからは社会党ではなく、私や私と同じ考えの人間を、自民党であっても応援したいという。労働組合だから社会党だと固定観念を持っていたが、考えが同じなのだから自民党の議員を応援してもおかしくないだろうというわけである。これこそ、まさに特筆すべき変化だ」（『月刊宝石』十二月号）。

労働組合の中央幹部の多くは日経連の「マインド・コントロール」の結果、すでに述べたが、「企業あつての労働組合」に身も心ものめり込んでしまった。この労働組合の主張に「労働者がいるから」と、社会党再生・強化を口実に「民主・リベラル新党」にナダレ込みたいという人が少なくない。社会党はダメかもしれぬが、ダメな社会党再生のために、労働組合強化が必要」という主張である。この考え方は間違いない。

かつて、社会主義政党と労働組合とは、いずれが優位するかという論議があつた。政党と労働組合とは別の組織であり、その直接の目的を異にしていることは、本誌の読者なら周知の事実で、組織形態と組織の方法、おたがい自主性をもっていることも当然のことである。しかし、労働組合にかぎらず、一般に大衆的組織体に対し、社会主義を実現するために、政治権力の掌握を直接の目的としている社会主義政党が、優勢なる精神的影響をもちえないでは、その目的を達成することはできない。本来、この高い意識からくる優位を、一切の大衆団体（もちろん労働組合もふくむ）に対してもつことを遠慮する必要は、社会主義政党にはない。こうした優位は、他の組織の自主性を犯すことなく、有機的かつ精神的な結合をつうじて、労働組合その他の大衆組織を指導しうる。

「道」を綱領とし、反自民の意識を結集しえたかつての社会党は、その資格を十二分にもっていた。しかし、今の社会党は残念ながら、社会主義政党でもなければ、「護憲の党」でもない。じつにくやしいことだ。しかし、科学的社會主義を希求する者の第一歩は、現実、あるいは事実を冷徹に分析し、歩みを開始することである。空想や自己の想いにとらわれることは、「科学」に反する。いま「護憲の党」を主張することに、発展はない、などという主張は、まさに「敗北主義」以外の何物でもなく、きつい言葉でいえば「転向」である。

政党は「高い志」をもたねばならぬ。政党員も同様である。村山総理大臣や久保社会党書記長におもねるなど、もつての他である。

党員の良心は健在なり

——各地の討論ひろがる——

戦後五〇年をへて、日本独占資本は経済的にも、軍事的にも世界一、二位を争う大国として確立されてきました。

今日、社会主義国の崩壊等々の条件もあり、大国における世界市場の再編、再分割の競争と対立が激化しております。

フランスの核実験は核兵器の再強化のために行なわれていますし、日米安保も沖繩の悲痛ともいえる叫びを無視して、アジアの安保から世界の安保として強化されようとしています。経済力と軍事力をもって大国の世界市場支配体制がしかれつつあるのです。

このような状況下、日本独占資本は「行政改革」と銘うって、軍事、経済、政治の抜本的再編にのりだしています。

政治的には、保守独裁体制をとるために、社会党の解体を強制し、経済的には労使関係の抜本改悪、合理化がすさまじく強行されています。

軍事的にはいよいよ「憲法を改悪」して、軍隊とその海外派兵の公認を現実化させようとしています。

私達は、再び誤りをくり返してはならないとの思いで、護憲の社会党を守りぬこうと県下各地の同志、職場の同志との討論を進めてまいりました。

その中で「党員の良心は健在なり」との感想をもちました。日本社会党を守りぬくことはできるとの確信も深めました。以下討論の特徴を記します。今後の運動の糧にしていただきたいと思えます。

「筋を曲げることはできぬ」

民間未組織の若いAさんは「今まで労働者の社会党ということをやってきました。平和の党が、平和の党でなくなった。信用できなくなった。職場の人も『社会党は信用をなくしたね』といっている。今の自分は、政治に無関係、無関心になっている。政治に対して指針がなくなった。政治のことが頭に入らんようになった。こんなになった自分が淋しい。」（八幡浜）と率直に気持ちを打ちあけてくれました。

社会党の現状は良心的な国民の生き方に強く打撃をあたえています。政治不信を社会党が増長させたのです。この責任を誰がどうとっていくのでしょうか。私たち以外にありません。先輩のOさんは、「護憲の社会党を生きがいとしてきた。いくら中央がウマイこといっても七〇歳になればガンコになる。耳に入らんわ。むこうが見えない者に党をあずけることはできません。資格のない者（山花・田辺・久保氏ら…）は去れといいたい。本物の社会党が残っていたということを出さないかん。党の中にも本当の社会党を再建するという者が残っているということを出し、期待にこたえないかん。」（北条）

Yさんは「私は離党届けを出すつもりはない。新しい党に入党届けも出さん。私はあくまで社会党員ゾー新党に行く人は事実上脱党していくことになる。全国大会で口頭提案で解党を決めた。こんな大会あるか？そこを根っこにしていく人はいきなさいや、私たちは党でやりますと結集していきたい。」（宇和島）ともいわれました。「筋を曲げるわけに

はいかん」(新居浜)との「決意」と「期待にこたえ」社会党を再建しようとの意欲は高まりつつあると思います。

「決意と不安」

しかし、困難な中での決意は不安をかかえつつのものであります。

若いKさんは「自分たちで護憲の党を組織していくのはシンドイ、数のこともある。社会党、労働組合の後退をくいじめれなかった運動の実態がある。大衆との結びつきの困難な時だけに、今集中的にやるべきことは何かを意志統一しないとつぶされる。」(松山)、Tさんも「今までの党を残していくだけでは何もできない。単に護憲の党だけではもの足りない、闘う党を望んでいると思う。少数派から出発するが、労働者どう結びついていくのか? どういう方針で結びついていくのか、行動はどうするのか、チラシ、ニュースで大衆にどう訴えていくのか? 等々考えると不安が残る。」(新居浜)などです。

また、大先輩からは「ネットと護憲懇談会のニュースをよんでいると選挙の勝ち負けだけが表に出ている。地道な闘いをどうしていくのかの考えがないように思う。労働組合のしめつけも厳しくなると思う。しかし「道」がわしらにはある。初心に返って、悪い者が出ていってスッキリした。数は少ないけどやるしかないと思う。護憲の運動をやらなさんと。若い者にいいたい、ワシらが本家やという精神を忘れるなど、自分の意志で入党したんやから、自分の意志で社会党から出ないで再建したい。」(宇和島)ともいわれました。

党も労働組合も、正に先の見えない幹部にまかせられなくなったということであり、いよいよ「民衆」の手にとり戻す時代になったのです。それは当然「責任」をも生じてきます。不安もあります。しかし、歴史を動かし、進歩を担ってきたのは、民衆の知恵と力なのです。労働者の歴史的使命は労働者自らで実現する他にはないのです。誰も手伝ったり、代行はしてくれないのです。真実を大切にして、勉強、また勉強を重ね、協力に協力を大切に、まず勇気をもって始めること! しかないと思います。

課題となる党と労働組合の強化

「仲間が死んだ。Eさんこのままでは殺される」といつてきた。組合にいつていきさいや」といつたら「いつてもとりあげてくれん」という。「帝人精機の首切りが新聞にのっているのをみて、ワシらはこうならんように、事業を守らんかん」という。人の首切りに対して怒りよりも雇用を守るため、残業をし、セールスもして企業を守らんかん」という状況。「超勤命令も、外に出て帰ったら紙切れおいてるだけ、労働者の都合なんか聞くんもりない。」……等々、職場に憲法や労働運動がない状況が報告されています。

私たち護憲の社会党は、何よりも労働者の職場の権利の闘いを組織しなければなりません。政党の第一義的任務は、労働組合の強化にあります。

そのためには、全国の経験をつなぎ、小さな闘いも全国で支援する「労働者の党」が必要です。職場や地域に人権の闘いをほりおこすため「社会党」の再建を!

(N)

久保派・十二月結成 「リベラル新党」対立激化 村山派・来年ズレ込み

幻想とバブルのリベラル新党

「池の水に映ったお月さま」とかつて構造改革論を評して佐々木更三元委員長は名（迷？）言をはいたことがあった。久保氏や横路氏のいう三極新党も「水鏡の月」のたぐいであろう。この新党は思いつきから出発して、今なおそのイメージすら国民に明確にできないことを考えるとお月さまどころかバブル（気泡）のようなものでしかないのだから。共産党の志位書記局長は「社会党は保守政治に吸収されたわけだから、それから独立した別の極ができるという考えは幻想だ。どこまで行っても見通しがつかず、車で走ると先に行く『逃げ水』のよう」と批判したそうだが（国会で十一月二日・朝日）。いずれにせよ本誌が度々強調しているように、仮に「三極新党」と称する党ができ、さらにさきがけと合同しようとそれは次の総選挙で消滅する「泡」でしかないことは、火を見るよりも明らかなることである。

ところが、その幻想から出発した「リベラル新党」に、当初反対の人達も含めて期待する一部の左派系のいわゆる活動家といわれる人達が表面化しているから驚きである。その最右翼に位置するのが社青同OBの一部であって、大学生のとき社青同に加わり、その後党や労組の専従になったなかの一部にその傾向が強い。その典型的な一つの例を紹介し、その誤りを見ることにする。

「新党に移行する多くの党員、なかには基本政策の変更、新党移行に積極的だった人もいるだろうが、その人達も含めてお互いに激励しあい、一緒に活動し、新党を勤労国民と悩みを共有し、解決のために努力する政党に強化していこう。」（「党建設をめぐる当面の課題」川村訓史・「社会主義」十一月増刊）と述べている。この人は新党反対でもなかったようだ。ここまでくるともう批判する気にもなれない。左派党員の多くがぎりぎりまで新党に反対しているのに、新党推進派を何故激励することができるのであろうか。もう新党が結成されたと思っているのか。社会党の「解党Ⅱ新党」が財界を中心とする保守勢力の周到な画策にもとづく攻撃であることを川村氏は知らないわけではあるまい。それなのに新党は不十分ながら「基本的には労働者の利害を代表する党としての性格を残すであらう」とか、「私達は退却していることをまず自覚し、退却戦のすべをまなぶ必要がある」などと長々説教している。簡単にいえば、この人に代表される連中の致命的欠陥は、①資本の側の攻撃を甘く見ること。②党内の解釈改憲派まで共同闘争の仲間だと考えていること。③その一方で解党・新党に反対しているいわゆる護憲派に対して排除と思想闘争の相手だと考えていること。④労働運動後退の責任を左派にあるとしていること。⑤護憲左派を「護憲新党論」だときめつけていること。⑥第三保守党である新党の下で今までも同じように諸運動を展開できると思っていること、などである。このような判断でこれからの党を考えているとしたら新党はますます反動性すらもつ第三保守党になり下るであらう。ある友人が教えてくれた。「川村論文のような人を『極楽とんぼ』（うわついたのんき者のこと）というのだ」と。

ここでは事態を冷静に見つめてる社会党の長老・木原実さんの言葉を紹介する。
 「もしここで解散、総選挙ということになれば何をもち、どうしてたたかうのか。しかも自分で仕掛けた小選挙区制のもとで、多数の仲間たちが消えていくのを見るだろう。社会党の解党・新党結成は、社会党的なものをきりすててなお生き残ろうとするものがあるが、それはさみしい願望ではない。保守二党制（つまり保守独裁）に収れんされる政界再編というマヌーバア（政治謀略）は、社会党的なものの排除と第三の小党の存在さえ許さないという筋立てであるからだ」。

そして木原さんは黨員としての主体性ある前進を促している。もう少し続けよう。

「そのマヌーバアの筋立てにのりながら、それに抗する道があるとするのは、政治的気休めにすぎない。いま、いづれにしても展望のない解党・新党結成前にして、黨員として思うことは一つしかない。自分のアイデンティティを、しっかりともって行動することである」。

さらに木原さんはわれわれの再建・社会党については、「党が消えようとする前夜、状況に流されるのではなく、もう一度自分自身をたしかめたい。そこからひらける展望や行動が再生する社会党を生むにちがいない、と思う。」と激励している。「理屈と膏葉はどこにでも付く」といわれるが、新党派とその追隨派の理屈は、自らの地位保全と日和見を正当化するものであって、膏葉ほどにも効かない。

新党は来年にズレ込むか

十一月十日に「新党準備会」を発足させてはみたものの、メンバーが小振りで、新党へ党内外の勢力を引っ張ってゆく人望や魅力をこの人達に望むべきもなく、準備会は出発時点から行き詰まっている。しかし強気の久保書記長とその側近は、十一月中に綱領、政策、組織、財政などの原案を起草して（大体は「九五宣言」以来つくられていた）明らかにするという。そのうえで国会の会期終了後（十二月十五日まで）、直ちに十八日メドに結成大会を開く日程を固めたといわれる。だがこの日程では進みそうもなく、結局年内は新党の枠組みと方向だけに終わりそうである。それでは何が問題になっているのか。ズバリ明らかにしよう。

（1）「準備会」を久保推進派だけで固めたことよって、単独新党に対して村山派を反発させ、久保派は孤立した。久保派支持だった大労組も村山内閣と自民党との関係を良好にしないと、合理化攻勢に対応できないということで、村山派に同調している。

（2）村山派には、幻の「武村党首論」が出てからは、「来年新党説」（さきがけの態度決定を待つという名目で）が台頭している。村山派の会長に山口鶴男前総務庁長官がなったことで、次々と新党へのブレイキがかかっている。例えば、次の総選挙は「新党」ではなくて、各党との選挙協力で乗り切ろうという案もでていいる。そうなれば党は流れ解散、又は分散してしまうことにもなりかねない。

（3）自治労、全電通などの「推進労組会議」は、社会党単独での新党移行では縮小再生座（党の分裂も考えられるので）となり、横路派も入れないので、有名な学者を座長格に党と労組そして横路・海江田グループを入れた、新しい協議機関を設置して、年内は新党の枠組みだけは決めようという考えになっている。これに久保派が同調するかどうか、論議を呼びそうである。

(4) 全国ブロック会議代表（県本書記長クラス）も大勢は、急ぐべきではなく、この際党全国代表者会議を開いて新党結成時期などについて協議すべきだと提案している。

(5) このところ一段と「党首候補」の横路氏の株が下落している。一つは横路氏のかつての側近の一人が三億七千万円の詐欺事件を起こし、逮捕されたこと。二つ目は、横路氏の政治力でさきがけが新党に同調、又は合同することになるという思惑で新党結成がズレ込んできたがその見通しが消えたこと。さらには横路グループ（フォーラム）の結集が盛り上がらないこと（各地のシンポジウムは党内最右派と労働組合の動員に終わっていること）。「推進労組会議」側も横路氏が事務所運営の資金だけはださせるが、さきがけの鳩山や海江田の面々に引きずられ、態度がさっぱり明確でなく、何を考えているのかわからない、という不信感が強い。

以上は、これから新党を結成しようというような党と幹部の姿ではない。まさに「精算事業団」である。加えて村山内閣の命運も「氣息奄々」たる状況である。沖繩問題の処理が事実上の終わりとなりそう。どの時点で自民党に首相の座を渡すか、が問題となるが九六年度予算の決着（必ずしも成立とはいわず）が一つのメドである。その際社会党は自民内閣に残留又は閣外協力となる。

社会党再建準備会が本格始動

護憲懇談会は、全国の仲間からの激励によって、社会党がいずれにせよ解体状態に入った現状のなかで、懇談会結成のときの公約のうえからも、さらに一步、政治的に前進した態勢をとる必要に迫られた。そのために「再建準備会」をこのほど発足させた。全国的に仲間の結集が進んでおり、「懇談会」がその中核的運動のため特別委員会の形で発足させた「再建準備会」は大きく歓迎されている。

準備会のなすべき任務は何か。

(A) 綱領、規約、基本政策、運動方針の草案を準備すること。そして大衆討議にかけ、われわれが再建する党はどのようにすべての働くもののためになるうとしているのか。革新的政策はもちろん憲法にもとづくものであるが、どのように勤労国民に役立つのか。職場の権利をどう拡大しようとするのか。社会党の何を残し、何を捨てるのか。選挙における勝利の見通しはどうか、など。

(B) 再建社会党は、平和運動、反安保、反基地のたたかい、住民・市民運動との関連でどのような党組織をもつのか、そして日常活動をどうすすめるのか、今までの社会党の關係で、再建の党への期待は大きい。

(C) 政党にとって「機関紙」は最大に重要である。今の「社会新報」は連日減部が続いているといわれる（最大発刊時三十六万部、今十六万部という）が、いずれ近く廃刊になろう。そのときわれわれの新聞はこれに代わるものとしての任務をもつ。

この機関紙は近く「見本刷り」を発行すると発表している。これに答え、本格的発行後の分局体制をとらなければならぬ。分局体制の確立が最も重要な機関紙活動の要である。機関紙は当面「週刊紙」となろう。しかし一般の大新聞と情報量に差はあれども、内容の質で勝負となる。

（政権研究班）

アメリカ労働組合再生の闘い

— 新たな戦闘性の芽ばえ —

挑戦者スウィニー

先週、ニューヨークのシェラトンホテルの間に合わせの選挙対策本部に座っていたジョン・スウィニーは大変な状況にあると実感していた。アメリカ労働運動内の反抗者と自認している彼は、数百万に上る彼の崇拜者を頼りにしていた。AFL-CIOの議長選の対立候補である、六一歳のスウィニーは、彼を支持すると見込んでいるいくつかの組合軍団を票読みをしていた。それは、鉄鋼労働者や自動車産業労働者、連邦職員、全米トラック運転手組合、機械工組合であり、つい最近、農業労働者が加わった。ここに至る彼の道のりは全て常識破りのものだった。アメリカ労働総同盟—産業別労働組合会議として知られる連合が四〇年前に結成されて以来、その議長職はけっして対抗馬の出ない世襲的地位 (feudalism) だったのだ。それが今、初めてこの職をめぐる選挙が激しく闘われているのだ。この木曜日(十月二十六日)に出る結果は、労働者がかつての恐るべき政治的影響力にどのように迫ることができるかを決定づけることになろう。

少々皮肉じみているが、スウィニーはこの年の初めまではトーマス・ドナウエー(六七歳)の後ろ楯だった。ドナウエーは現職のAFL-CIO議長であり、いまスウィニーはこれに対立している。スウィニーは、一六年間議長であったレーン・カークランドにその職をNo2のドナウエーに譲るよう働きかけた。しかし、カークランドは拒否し、スウィニー自身が議長に挑戦することを決心したのだ。カークランドは六月に辞任し、これによりドナウエーが議長におさまった。

ドナウエーは傘下七八単産の総意による組織運営を行うと語り、スウィニーは組合の中のはねあがりの利益を代弁しようとしていると非難する。これに対してスウィニーは、カークランド時代は歯の抜けた運動にどンドン陥っていったと断罪する。挑戦者は人もうらやむ自分自身の記録を売りにしている。一九八〇年にスウィニーがサービス労働者組合の委員長になって以来、その組織数は約二倍の一〇二万人に増えた。AFL-CIO内で最も成長した単産である。先週、彼はやや優勢に立ち、勝利を確信した。

前途厳しい、運動の再生

しかし、どちらが勝利しても、アメリカの労働運動を再生させるには英雄的努力が必要であろう。ダウンサイジングとますます強まる組合潰し戦術に攻めたてられ、労働組合の組織率は六〇年代半ばの三五%から一五%にまで低下している。落ちぶれた組合は平均的労働者の賃金を引き上げる力を失ってきており、現実インフレ調整するとこの二〇年間の賃上げは無きに等しい。一方で生産性は上がり、企業利潤は膨れ上がっているのだ。

噴出する「むきだし」の怒り

が、再興は凶られつつあると言える。労働現場のはかり知れない辛苦と誰もが認める権利侵害が、労働者の間に新しい戦闘性を育てはじめている。そしてこれが復活の兆候を生

み出している。「労働現場におけるこれほどのむきだしの怒りは二年半前(労働長官になった頃)にはなかった」と、ロバート・ライシュ労働長官は二週間前の「タイム」経済分析会議で語った。「私が全国を回って未組織の労働者たちから繰り返し聞かされたことの一つは、『今まで組合に入るなんて考えたこともなかったが、いま初めてそのことを考えている。誰かに助けてもらう必要があるからだ』というものだ」と彼は語った。

※ ロバート・ライシュの邦訳書としては「ザ・ワーク・オブ・ネーションズ」(ダイヤモンド社、九一年)

※※この間のアメリカの状況を知るには、次の岩波新書二冊が読みやすいのではないかと思います。「アメリカ 黄昏の帝国」(進藤栄一著)、「アメリカ産業会の盛衰」(鈴木直次著)。前者はクリントン政権の当初の性格を知ることにも参考になります。後者の結びでは以下のように書かれています。

「…このような労使関係の大きな変貌が、アメリカ製造業復活の原因の一端にあったことは疑いない。だが、同時に、急速なリストラ策のマイナス面も指摘されるようになった。今回の不況では管理、専門職などホワイトカラーの雇用調整が戦後初めて本格化し、ホワイトカラーとブルーカラーの失業率は急接近した。この大規模な人員削減によって残った従業員の士気は低下し、このため経営者は仕事の満足度を高める方策に頭を痛めている。また、ブルーカラーの間にも賃金の上昇鈍化や人員削減への不満が鬱積し、それが組合運動の活性化につながっているとの指摘もある。九三年には組合員数が一四年ぶりに微増に転じ、九四年には全米トラック運転手組合(チーム・スターズ)が一五年ぶりという二四日間の長期ストを打った。最近ではGMで新規雇用増を求めるストライキも起こっている。確かに、NAFTA(北米自由貿易協定)の成立は阻止できなかったが、クリントン政権の成立は労働組合にとっては久々の明るい話題だった。

だが、ここからだちに組合がかつての勢力を取り戻し、かつての同様な運動を再び強力に展開するとは考えにくい。UAWやUMW(全米鉱山労働者組合)のように有力組合の中で労使協調を進めているものも多い。組合の自己革新は進み、しばしば腐敗と結びついた古いタイプの指導者の交代も相次いでいる。しかし、労使協調の流れが社会のなかにしっかりと定着するためには、労務管理を根本的に変革し、成果を雇用保障という形で労働者に分与したり、戦略決定に組合を参加させるなどアメリカの企業文化そのものの大転換が必要だろう。確かに、一部では、事態はその方向に進んでいるようである。しかし、他方では、雇用保障の抜け道を探して工場閉鎖が繰り返されている現状があり、また組合幹部の中にも労使協調に反発するグループも少なくないといわれている。余りにも大胆で速やかなリストラが労働者や組合のみにその負担をしわ寄せすることになると、古いタイプの労働組合運動が支持を集め、労使の前途を危うくすることにもなりかねない。(P二二四〜二二六)

上げられたのろし

運動の復活は新たな勝利や新鮮な戦術、元気いっぱい闘争心によって活気づけられている。二週間前、連邦仲裁官は飛行乗務員二万人に向こう六年間平均一七%の賃上げを認めた。乗務員たちは九三年にアメリカン航空でストを起こし、企業側が雇った代替労働者を勤務させないで闘争を継続していた。「これは本当に、労働者へののろしだ」と乗務専

門員協会の委員長デニス・ヘッジは気炎を上げる。「ストやそれ以上に困難な闘いを追求してきたことよって、経営者側をテールに直すことができたのだ」。

航空機製造の巨人ボーイング社の従業員は、彼ら自身の力による膠着状態の突破を図っている。新規協定の話し合いが頓挫した後、カンサスとオレゴン、ワシントン州の三万二千人以上の機械工がストライキに入った。闘争のきっかけの一つは、ボーイング社が中国市場での売上増をねらって、熟練を要する組み立てラインの仕事をアメリカ工場から中国へさらに移すことを計画していることだ。「スト中、一般組合員がこんなに生き生きしていたことは、ここ何年間もなかったことだ」とジョージ・クーピアス国際機械工・航空産業労働社協会委員長は言っている。

※「ジャパン・タイムズ」十月八日付けにボーイング社のストの記事があります。

「：機械工のストは四八日間続いた八九年以来。：ボーイング社は人員のピーク時八九年の一六万六千人から一〇万五千人に人員を削減してきた。：新協定を結ぶにあたって、労組は賃上げ額はおおむね了解しているが、健康保健掛け金の新たな徴収、その他の控除の引き上げに猛反発している。また、この六年間に行われた激しい人員削減から、雇用保障を強く求めている。：ボーイング社の会長と社長は新協定提案前に従業員に手紙を送った。そこでは、連邦軍事予算の削減とヨーロッパのエアバス会社との競争でコストを下げざるをえないことが強調されていた。『我々の顧客－航空会社も連邦政府も－様にわが社の製品が非常に高いと言っているのです』」。

一四年ぶりに組織数は増大へ

全国的には、労組の組織数は九三年から九四年にかけて前年比三%伸び一千六百六十万人になり、一四年間続いた減少に歯止めをかけた。増加の大半はホワイトカラーとサービス産業、公的分野の労働者で占められている。

しかし、賃金労働者数の増大に対して、組織数は遅れをとっている。九二年から九四年にかけて賃金労働者は約四%増えたのだ。ゆえに組織率はいまだ低下している。「労働者数が増えるにつれて組合も大きくなるだろう」、「しかし、どんなに新しいメンバーが増えても、その一方でダウンサイジングが仲間を奪っていくところに困難がある」とドナウエーは語る。

戦闘的行動、新たな戦術

これまでほとんど見ることもなかった新たな戦闘的行動が、労働現場でしばしば起こっている。この三月にあった全面衝突では、ニューヨークのポートジャーヴィスのカトリック系慈善病院の一〇〇人の正看護婦が六ヶ月のストライキの後、向こう一年三四半期にわたって一六%の賃上げを勝ち取った。ピケットラインの中にはおばあさんも何人かいた。彼女たちは、自分がピケをはるなんて想像だにできなかったであろう。全国保健・福祉サービス従事者労働組合に属する看護婦たちは、代替労働者の雇用にも屈しないで、ときには零下二九度にもなった天候下でピケをはりとおしたのだ。「このストライキが労働運動の一步前進であると私は考えたい」とストの指導者の一人スー・マフィーは語っている。シカゴの南地域では、この夏、ヘレン・ミラーが組織された労働運動に今までにない衝撃を与えた。サービス労働者組合の一員であるミラーは、*infected stroke*の犠牲者のために

日に七時間割いて闘い、イリノイ州の法律を変えることを勝ち取った。訪問看護婦の一時間当たりの報酬を三・三五ドルから五ドルにさせたのだ。地方労働組合のボランティア行動の責任者として、ミラーはこの法律のために宣誓証言に立った最初の「看護助手」となったのだ。今、彼女は訪問看護労働者自身の医療給付を要求して、自由時間をその組織化に当てている。この仕事は、「どれだけ電話をかけまくり、個別にドアをたたかかにかかっている」「話をし続け、つくし続けるに尽きる」とミラーは言う。

スウィニーのサービス労働者組合が支援する「清掃員に正義を」と銘づられた労働者のキャンペーン以上に対決的—または成功率の高い—な戦術は、少ないであろう。この運動では、五年間で三万人のビル清掃員が組織され、サービス労働組合の中の清掃員は一八万人を占めるようになった。彼らはこの春、ビバリーヒルズのウイルシャイア大通りとロデオ・ドライブ（ロサンジェルスのビバリーヒルズの大通り、高級品店が並ぶ—ランダムハウス）のシックな交差点に座り込みを組織し、四十九人逮捕された。しかし、デモンストレーションの代償として、ロサンジェルズ地域全体で八千人の清掃員の雇用を得た。一時間当たり六・八〇ドルというこの地域ではトップの賃金を得ると共に、保健給付、有給休暇も勝ち取ったのだ。

労働組合の苦境は続く

もちろん企業側も、組織労働者の挑戦をはねつけるために彼ら自身の武器庫を持っている。企業はオルグの口説きにシンパシーを持っているように見える従業員を解雇することによって、しばしば簡単に労組を窮境に追い込んでおくことができる。フォークリフト・ドライバーのジェローム・チルズは先月、優先解雇への不服申立を全国労働調整委員会に正式に提出した。シカゴ地域の倉庫経営者が彼をレイオフしたからだ。急いで下ろせと命じた発泡スチロールの箱のパレットの包装をチルズが破ったから解雇した、と会社は言う。チルズは、ユナイットの主張に賛意を表したから首を切られたと言っている。ユナイットは三〇の事業所で投票を実施して、最近結成された繊維労働者組合の連合体である。

また、労働運動は政治的にも孤立している。全米鉄鋼労働組合の委員長ジョージ・ベッカーは語る。「我々は労働者を守る法律をつくることができなかった。我々は民主党員だ。しかし、遠く七〇年代の党員だ。労働者の生活水準を維持する法律をつくるのはとても無理だ。我々は奈落の底へのレース上にある。コースを変えねばならない。」

次期AFL-CIO議長の問題は、このような壁を乗り越える援助をすることであり、かつての誇りある運動に新風を吹き込むことである。「誰が勝っても、組織活動に多大の努力をはらっていくことになる」とライシユは述べる。最終的な分析で彼は以下のように付け加えた。「労働者はおそらくただ一つの選択肢として、組合に回帰するだろう。そうならないとすれば、組合はもつと元気で想像力豊かな運動体に変身していかねばならない、ということになる」。労働者の前途には大変な困難が横たわっている。（「タイム」九五・十・三〇）

※AFL-CIOの議長選—これは史上はじめてのこと—でスウィニーが勝った。「ニューヨーク・タイムズ」の社説（十月二十六日付）は、スウィニー勝利の背景を「彼が労働運動の古典的でつらい単調な仕事であり、かつ時間もかかる作業に惜しげもなく取り組んできたことにある。すなわち組織化だ。彼は組合幹部がひどくきらい、無視してきた人たちに注意を払ってきた。低賃金労働者、非白人、女性である」と。

安保条約廃棄・日米地位協定粉碎が「沖縄の心」

——十一・二集会での新垣洋子氏の提起から——

この報告は、十一月二日おこなわれた「いま、「護憲の党」の再建を」集会での新垣洋子氏の発言要旨である。当初、社会党沖縄県本委員長の新垣善春氏が予定されていたが、急遽、夫人のよう子氏が立たれた。文責は編集部にあります。
(編集部)

私が日本社会党に入党したのは二〇歳のときです。これまで頑張ってきました。一九六七年の大衆路線か大衆化路線かというたたかいたときに、稲村同志（稔夫氏）のお宅に四、五日やっかいになり大会に参加した経緯があります。いま、まさに状況がひじょうに似ているのではないかなと思いつながらこちら側に立っています。

沖縄そして「日本本土」

敗戦（一九四五年）、沖縄は敗戦と同時に占領軍の思いのままの政治をなされています。九年後に「今浜」「伊江島」闘争がありました。ブルドーザーで沖縄の土地を奪いつくしていった許せない行為であります。しかし私たちはブルドーザーの前に座り込んで闘争を展開しております。その時、私は高校一年生でした。

一九五六年プライス勧告が出されて一六年半分で一括払いをするというのです。一六年半分の一括金と未来永劫（みらいえいごう）基地はアメリカ軍のものになるという思いで県民はたたかいつけてまいりました。いままさに少女暴行事件のなかで沖縄の県民は、あの基地闘争を思い起こして沖縄県民が闘わなければ、未来永劫に沖縄は日本政府と米軍の思いのままになるのではないかという思いをもって今日たたかっています。プライス勧告が出されたのと同じような闘いがなされています。

一九五六年には私たちの闘いで阻止してまいりました。しかしながら日米循環交渉のなかで一九七二年五月一日に沖縄は返還されましたけれども、核抜き本土なみを私たちは求め、日本国憲法の下にかえるんだという闘いを一生懸命してきた者にとつてがっかりする沖縄返還でありました。

皆さんは日本社会党五〇周年の輝かしい歴史をふまえて、こんにち日本国憲法の基で生活をなさっています。私たちにも確かに日本国憲法が適用されているかのように見えますけれども、五〇年間アメリカ軍が日本の米軍の基地使用の七五％が沖縄にあるという現実をみたときに、本当に憲法は沖縄に平等に適用されているかどうか疑わしいものがございます。

社会党は「沖縄の心」を裏切るな

そういう意味で私たち沖縄県民が怒りに燃えて今回の少女暴行事件で基地の重圧に苦しんだ県民の怒りが爆発しているところでございます。私たち女性はいち早く行動を展開しました。NGOの女性会議に参加した女性を中心にして、さっそく行動を展開したり日本婦人会議が行動をおこしたり、さまざまな行動をすることで県民世論が盛り上がり県議会でも全会一致で決議されています。一つには、米軍人・軍属による犯罪の根絶、二つ目に被災者にたいする完全補償、三つ目に日米地位協定を見直すこと、四つ目に基地の整備・

縮小をおこなうことの抗議内容を盛り込んだ決議と意見書が採択されました。

社会党が中心となつて県議会、全政党に呼びかけまして、超党派の県民大会を開こうと一八の呼びかけ団体で七二〇団体に呼びかけました。一〇月二七日には八万五〇〇〇人の県民が結集し、八万五〇〇〇人を結集させるために日本社会党沖縄県本部は日夜奮闘しておりました。県議会のなかでも社会党が一生懸命やっている姿をみて、自民党の県議会議長でありますが行委員長になり大きな集会を成功させることができました。バス会社に対しても会場までのバスは無料にしてほしいという粘り強い行動により、県民世論も反映してバス会社もどこから乗っても会場までの片道は無料という、これまでにない大きなうねりになっていきます。

「一〇・二二」の決議をもちまして呼びかけ代表二一人が総理・官房長官・外務大臣・防衛庁長官、アメリカ大使館に大会決議を送付しております。外務大臣の対応は日米安保の重要性を強調するだけで沖縄県民の要請に応える誠意はまったくございません。政府与党の解決案が提案されていますけれど、県民の要求に応えるものではないわけでありまして。一月四日に総理と太田沖縄県知事が話し合いをする予定になっております。これまでの経過のなかでもどうしても県知事が署名しないものだから説得しようとして、防衛施設庁長官を派遣させましたが会わずに帰っています。それは沖縄県民が会わせない状況をつくりあげているからです。そういう外堀も大衆運動でつくりあげなければ私たちの憲法の問題も危ないわけではないかと考えるわけでありまして。一四日には一〇〇人ほどの行動団が外務省に抗議する予定になっております。

一月四日の会談で内閣の命運をかけることと明言された村山総理が、沖縄県民の期待に応えられるように頑張ってもらいたいとして沖縄県民は中央を見つめております。

沖縄にも婦人団体の組織がありますけれど、これまで基地撤去や安保などとは思想を持ち込んではいけないということで話し合われませんでした。沖縄の婦人連合会も今回は「こういうふうな事件が起こることとは沖縄に日本のすべての基地が凝縮しているからであり、この基地を撤去するまでには絶対にたたかいたかいの手をゆるめない」と大会でも安保条約破棄・日米協定を見直せと抗議決議を採択しております。このように沖縄ではすべての県民が私たちが選んだ社会党の総理に目を向けております。

「沖縄の心」に支援を

今回ははからずも五〇名の黨員のなかに入れられ表彰されました。私は五〇年間なんのために頑張ってきたかということを考えなければならぬと思っております。たしかに日々の生活におかれて、「基地のない生活をおくっている方には沖縄の痛み苦しみはわからない」と思っています。私たちは沖縄県民としてみなもとなつている日米安保条約破棄に絶対に頑張っているべき、そして頑張っている皆さんがこのような集会を通して国の存在を脅かしている安保条約破棄・日米地位協定を粉砕する勝ち取るべきところが、真の日本国憲法のなかに生きる人間として存在するのではないかと考えています。

太田知事もこのような沖縄県民の心をしっかりと受け止めて代理署名拒否に奮闘しております。全国の皆さんぜひ沖縄の現地でもあたたかい声援を送っていただきたいと思えます。マスコミの方々もいらっしやいますけれど、沖縄のこの少女は小学生なんです。お昼の番組のエスカレートした取材合戦は絶対にやめてもらいたい。切実な思いで一杯でございます。私たちの本當の視点をどこに向けるべきか、闘争の視点をどこに向けるべきかということをお願い申し上げます。

健康に留意し、勝つまでたたかおう

——長崎・佐世保闘争団の仲間と交流して——

十月五日から七日に、長崎・佐世保闘争団にお邪魔させていただいた。この交流期間中、同行してお世話いただいた長崎闘争団の山口事務局長に心から感謝しますと共に、現地での案内等のお世話いただいた両闘争団の方々、ありがとうございました。心温まるご配慮に対し厚くお礼申し上げます。

「革命的楽天主義」

訪問しての初日、長崎県支部で闘争団の状況の説明を受け、長崎地区労での交流を図るなかで、地区労運動のなかにも闘争団の闘いが根付いており、国鉄闘争の地域への着実な拡がりを実感できた。夜の交流会の席では会場が元ヤード近くの組合事務所ということで、僕にとつては、我家に帰ってきたような安堵感を感じられ、レールの懐かしい匂いが、このうえない演出のように感じられました。この日は、あいにくの小雨模様ではあったけど小雨降る夜のヤードの光景は、何とも素晴らしく自分が国鉄の職場に戻ってきたような気分でした。それと同時に、大好きな国鉄を解体してしまった分割民営化に対する怒りが湧きあがってくるのを強く感じた。

長崎闘争団の方々と交流では、最初は少々緊張してしまっただけど、杯が進むごとに、旅の疲れも忘れ意見交換も活発になっていった。そのなかで現在の生活状況や、家族の方々の状況などを聞かせていただき、一人ひとりが置かれている立場を再認識することもでき、また、「勝つ」ためには闘いを地域にしっかりと根づかせていくことの重要性を学ばせてもらった。

正直言って、現地に行くまでは厳しい闘いを強いられている情勢から、少し元気がないかな？との想いがあつただけで、その予想は見事にハズレてしまい悲壮感が漂っているでもなく、明るく元気に闘っている団員の方々を見て少し安心しました。交流の席での会話にも出ていましたが、「革命的楽天主義」だったと思うのですが、この例えがまさにピッタリだと感じました。闘いと言うものは、こういった気構えがなくては勝利できないものではないかと感じましたし、闘争団の面々が実に家族的雰囲気でもとまっているのも団結の証だと思いました。

こういった面が現在の労働運動に存在していれば、労働者の真の連帯感も感じられ運動が生き生きとし、政治の総保守化体制にも歯止めをかけることもできるなあと考えたところで、それから、長崎の交流で嬉しく感じたのは、僕が国鉄に在職していた時には面識も全くなかった人たちであるにもかかわらず、僕が元国鉄労働者だったと言うことだけで、すんなりと会話ができたということであつたし、一本のレールがつかぬ労働者の連帯感と言うか、他の運動にあまり例を見ない国鉄労働運動が築いてきた貴重な財産だと思つた。

肉体的・精神的パワーに脱帽

二日目、佐世保への出発の前に、長崎駅頭にて街宣行動に参加させていただいた。地域の仲間とともに行動を定期的に行われているとのことであり、ここでも反復強化の必要性を再認識した想いであつた。前日の交流会が盛大に終わったため、参加者のことを心配

したが団長さんを先頭に団員の方々が、整然と行動に参加されていた。さすが国労と思うと同時に肉体的・精神的パワーに脱帽した。行動に参加し、短時間の取り組みではあったけど闘いの連帯感が共有できたことを感じながら、長崎を後にした。

佐世保闘争団の事務所に到着後、状況説明を受け、その後赤絵工房に行き設立までの経過となり、現在の仕事状況について詳しく説明をしていただいた。素人ながらも作品の色使いなどに関心しつつ、修業などで大変な苦労を重ねながら、商品の受注にまでこぎつけられた団員の高尾さんをはじめとした闘争団の努力は並大抵の努力ではなかったろうと思つた。そして、国労マーク入りのカップで入れていただいたコーヒーマグの味は格別でした。お土産にいただいた国労マーク入りの湯飲み、大事に使わせてもらいます。

場所を移しての交流会では、闘争団の面々、家族、JR九州の国労組合員と交流でき、ここでも長崎同様、みんな元気で明るく実感できた。特に奥さん達の明るさは強く印象に残つた。辛く苦しいことも多いであろうに明るく元気に頑張っておられる姿は立派の一言。当方の奥方を恥ずかしく思つてしまいました。それからぎやかに場を和ませていただいた、古賀さん（字が間違つていたらゴメンナサイ）、松本さん、運転区の山口さん等々、本当に明るく楽しい方達ばかりでした。しかし、この席で少し気になったのは、健康状態のすぐれない団員の方が多いことでした。長期間の闘争になつてのことから病人が多くなるのも理解できますが、勝利するまで健康でなくてはなりませんので、くれぐれもご自愛してください。

この交流期間を通して、改めて労働者同志の連帯意識の必要性や、地域労働運動との共闘強化、仲間の素晴らしさ、人間の素晴らしさを実感、認識し、一〇四七名の闘いが持つ意義と言うものを学ばせていただいた。

国労の勝利なく、労働運動再生はない

僕は、レールからは離れましたが想いは闘争団のみなさんと一緒です。様々ないやがらせや、賃金・昇任昇格・人事などあらゆる面で差別を受けていますが、僕も、「負けるもんか！」の根性でこれからも頑張りつづけます。現在の自分の持ち場で国労の闘いを広め、支援し、連帯し、一〇四七名が完全勝利し、JR復帰の日が来るまで共に闘っていく決意です。

レールから離れても国鉄労働者魂は消えません。生涯、消えることはないと思います。多くの悲劇を生み、労働者の幸せを奪った、独占資本、国鉄当局の分割民営化を許すことはできないからです。

連合運動を中心とした労働運動総体が右傾化しているなか、国労の勝利なくして日本労働運動の再生はあり得ないと思いますし、人権・民主主義を守る闘いでもあり、社会正義を貫く運動であるとも思います。解決に向けて情勢は動きだしてはいますが、最後まで気を許さず共に頑張りましょう。最後に、長崎の山口さんと諫早でお別れする時、交わした会話で心に強く残った言葉が、「最後まで応援しますから、がんばってください」と山口さんを激励したところ、「あまり長くなっちゃね」と笑って答えておられたが、この山口さんの言葉に、闘争団の方々の様々な苦労や想いが凝縮されていると思ひながら九州を離れました。全く意をつくさぬ文となつてしまいました。また再会できることを楽しみにしています。

長崎・佐世保 両闘争団の方々本当にありがとうございました。国労万歳！（A生）

◇ 読者からのおたより ◇

大阪護憲ネットの第二回総会 十一月十一日に大阪護憲ネットの第二回総会を開き、山口護憲懇談会事務局長から記念講演を受ける予定です。「リベラル新党」には行かないものの、「当分ようすを見る」という人も少なくありません。早急に討論を深めていかねばと思っています。
(東大阪・T)

頼りになる「通信」 一年分送金します。今後がんばって発行をつづけて下さい。頼りになるのは「社会通信」だけです。
(青森・関晴正)

編集部より 勇気百倍のおたより感激です。関先生のご活躍に心から敬意。

永遠のテーマ 労働運動の強化なくして、社会主義政党の躍進もないと思います。反合理化闘争の再構築が永遠のテーマです。
(佐賀・M)

編集部より ムキダシの資本主義の時代です。職場の仲間の意識を正確にとらえ、共感を得る宣伝が、まず「反合理化闘争」前進への一歩です。

厳しい社会・職場状況 まだまだ日中は暑い日が続いておりますが、社会・職場状況ともたいへんです。健康に留意され、ご指導方よろしく！
(鹿児島・K)

編集部より 指導“なんてできませんが、一緒に歩みつづける決意はできています。

運動はこれから 激動の一年、アットいう間に過ぎましたが、「通信」のおかげでみなさんについて来ることができました。解党に反対する決議はなされましたが、運動はこれからです。腰は曲がってもがんばります。全国の仲間のご健闘祈ります。
(鳥根・Y)

編集部より 鳥根の決議は全国の社会党を愛する仲間を励ました。社会党をめぐる動向はこれからが正念場です。ご活躍祈ります。

「社会党」の再建 「通信」継続します。労働者階級の政党、「社会党」の再建を願っています。
(広島・K)

編集部より 護憲懇談会の議員諸氏は「社会党」の再建に全力を注いでいらつしやいます。広島では小森さん、秋葉さん、栗原さんがいらつしやいます。

九五九州「国労団結まつり」 十一月二六日、佐賀市・神野公園で、九五九州団結まつりが開催されます。九州内における各闘争団も一日も早い解決をめざしながら、長期闘争に耐えうる事業体づくりがとりくまれてきました。長崎の（企）テクソス、佐賀の（企）クリーン佐賀、そしていま鳥栖闘争団も企業組合設立を準備中です。団結まつりの成功に向け、多くの仲間の皆さんの協力を。
(福岡、国労博多闘争団)

社会党の良心は健在 今日、こちらは急に冷えてきました。ゆっくり秋の山へ登ってと思っていたのに、そうもいきません。「我社会党」のせいです。今、職場や地域や青年やと、黨員を訪ねて社会党再建の組織づくりをしております。足が重かったのですが、やってみるものです。社会党の良心、健在なります。新党へと逃げ込む同志たちの心はどうなんでしょうね。私の心は仲間へ暖められています。真実に生きる者が、本当の連帯や友情のありがたを得られるのでしよう。せいっぱいやってみます。「ニュース」送ります。
(えひめ・N)

編集部より Nさんのこの活動、みんな学び、実践しようよ。

世田谷区職からカンパ贈呈 今回の団結まつり（十月二九日）に、いつもお世話になってる世田谷区職の仲間から貯金箱のカンパがありました。「端数貯金を」とのことです。ズッシリ重い貯金箱をいただき、皆の厚い気持ちと国鉄闘争の重さを改めて感じてきました。
(北海道・深川闘争団)